

クノーリンとスペイン内戦--反人民戦線派がとらえたスペイン状況

島田, 顕

(出版者 / Publisher)

法政大学小金井論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

73

(終了ページ / End Page)

85

(発行年 / Year)

2010-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007100>

クノーリンとスペイン内戦

—反人民戦線派がとらえたスペイン状況

島田 顕

目次

1. はじめに
 2. クノーリンの経歴
 3. 何故クノーリン論文は発表されたのか
 4. クノーリン論文の中身
 5. クノーリン論文に対する評価
 6. おわりに
-

1. はじめに

1936年9月16日から19日にスペイン内戦勃発以降のもっとも大きなコミンテルンの会議(書記局・幹部会会議)が開かれた。この一連の会議で、ディミトロフの演説「スペイン問題について」¹により、スペイン、人民戦線のあり方、そしてスペイン政策の大枠が定められた。これに対し、旧戦術派、すなわち階級対階級戦術派の代表であり、ディミトロフ以前のコミンテルン幹部であったヴィリゲリム・クノーリンが反論、抵抗した。つまり、「正統教義(オーソドクシー)の強硬な擁護派」²としてのクノーリンの『プラウダ』1936年10月3日号に掲載された論文「スペイン人民は何を目指して闘争しているか(スペイン革命とその原動力の特徴について)」³が発表された。

本稿の目的は、クノーリンによって出されたこの論文の中身について分析し、クノーリンの理論的位置、さらに人民戦線推進派であるディミトロフ、トリアッティ、マヌイリスキーとの理論的差異を明確にすることにある。

2. クノーリンの経歴

ヴィリゲリム・ゲオルギエヴィッチ・クノーリン(本名クノリニシュ)は、1890年にラトヴィアの農家に生まれた。ラトヴィア人である。ラトヴィア社会民主党に入党した。ミンスクでロシア帝国陸軍兵士として従軍中、ロシア革命が勃発、ミンスクの労働者代表、ソヴェトを組織した。その後もミンスクで活動を続け、ベラルーシ共産党中央委員会委員等の要職を歴任している。

1924年の第5回世界大会で、全連邦共産党(ボ)(ソ連邦共産党の1952年以前の名称)代表団の一員として参加し、コミンテルンでの経歴を開始した。1928年のコミンテルン第六回世界大会以後、ブハーリン失脚後に、クノーリンと彼の仲間(ロゾフスキー、ピャトニツキー、ベラ・クン)は「階級対階級」の戦術を掲げて、コミンテルンの重要な地位を占める。その後、1935年7月から8月のコミンテルン第七回世界大会では、人民戦線戦術の転換に最後まで反対する。同様に階級対階級戦術派を形成していたロゾフスキー、ピャトニツキーらは、人民戦線戦術を最終的には受け入れ、自らの地位(特にロゾフスキーは、プロフィンテルン[赤色労働組合インタナショナル]書記長としての立場)を確保したのだが、二人とは対称的に、クノーリンは最後まで抵抗したことによってその地位を完全に奪われてしまった。それ以後、コミンテルン執行委員には再選されず、コミンテルンの重要な役職から締め出されたのである。コミンテルン執行委員会中央ヨーロッパ書記局長の地位も奪われた(1928年から1935年まで在職)。1937年6月に逮捕され、1939年に銃殺されている⁴。ちなみに1956年に名誉回復されている。

3. 何故クノーリン論文は発表されたのか

第七回大会以後、クノーリンに残った「もの」は『プラウダ』の編集者の立場だけであった(1928年から1937年まで全連邦共産党(ボ)中央委員会プロパガンダ・アジテーション部副部長)⁵。この残った立場を最大限に活用して反撃をしかけてきたのだろう。これは両刃の剣であり、自分の生命をも脅かしかねないものだった。だがうまく行けば、主流派をたたき、その権威を失墜させ、階級対階級戦術の復権とコミンテルンの重要な役職への自身の振り返りも可能と見ていたの

ではないか。

ここで注意しなければならないことがある。すなわち階級対階級戦術と人民戦線戦術は、ソ連(スターリン)から見た強硬派と柔軟派だけの違いと考えてはならない。両者の違いは不断に革命の恐怖を叩き付けるか、共産主義の綱領をもたない党派との連合か、というソ連を擁護するための手段の相違であるようだ⁶。しかし、それはあくまでもソ連邦から見た客観的位置付けであり、二つの派の理論家達は本当にそのやり方がコミンテルンの公式的な路線にふさわしいと考えていた。だから、これらの違いは手段のためのもの、駆け引きのためのものとは考えてはならない。

この論文によってクノーリンが何をもくろんでいたのかは明白である。すなわち、彼は人民戦線戦術とその推進派の追放を策謀していた。スターリンとレーニンの著述を最大限に利用して反論を試みていることから、さらに次のことも推測できる。すなわち原則に忠実なのは自分たちであり、主流派(人民戦線推進派)が原則から逸脱していることを際立たせるために、このような手法を用いたのだろう。またクノーリンはコミンテルンの重要な役職から締め出されただけではない。同時に彼はコミンテルンの機関誌である『共産主義インタナショナル』誌からも締め出されたといえる。『共産主義インタナショナル』誌への掲載が許されなかったからこそ、『プラウダ』に発表したのだろう。この論文をE・H・カーは次のように評している。「自制心を欠くクノーリンが『プラウダ』に寄せた論文で、スペインにおける現下のブルジョア民主主義革命が社会主義革命に転化する可能性に疑問を投げかけた。ブルジョアジーは伝統、教会、反革命とあまりにも堅く結びついており、人民戦線は革命の目的を達成するためには弱すぎるから、というのである」⁷。なぜE・H・カーのように、「クノーリン論文が社会主義革命に発展しないと述べている」と評価出来るのか。少なくとも、彼が結論として挙げている今日の課題が、「ブルジョア民主主義革命の最後まで遂行、ファシスト反乱者の粉碎、民族的独立と国家的保全と中世の残存物と後進性と文化の欠如と無教育の撲滅の保証」⁸は、人民戦線戦術派の主張と同様である。この点を詳しく分析したい。

4. クノーリン論文の中身

クノーリン論文の概略は大体次の通りである。第一に、スペインにおける大ブルジョアジー、大地主、大資本家、教会勢力の反動、反革命的団結の過大なる評価、そしてブルジョアジーが革命の推進勢力ではなかったことを実証し、人民大衆がその推進力であることを強調している。第二に、前者の論点に沿ってスペインにおける革命が社会主義革命に発展することを示唆するが、発展のために何をなすべきかを具体的に提示していない。唯一「成長転化」という表現を用いて論述を展開している⁹。さらにその「成長転化の実践的問題は階級勢力の相互関係次第である」¹⁰と述べているものの、今日の課題を「ブルジョア民主主義革命の最後まで遂行、ファシスト反乱者の粉碎、民族的独立と国家的保全と中世の残存物と後進性と文化の欠如と無教育の撲滅の保証」¹¹としている。提示していないからこそ、クノーリンはその可能性を低いと見ている、またはそれを疑問視しているとも読み取れる。

クノーリンは、大ブルジョアジー、大地主、大資本家、教会勢力の反動、反革命的団結が余りにも強力過ぎることを強調する。そして人民は、一度は君主制を廃止することが出来たが、しかし前者によって長年中世的後進性とその残存物、無教育と文化の欠如という軛の下に、人民(この当時はまだ農民大衆)は圧迫され、そしてその力を使い果たされてきた、力を弱められてきたと主張する。このことによって、人民戦線の諸要求を完全に遂行させることは出来なくされてきたという。そして、妥協的な政策として前述の今日的課題を述べているのである。

スペイン全体の問題について述べてきたが、クノーリンの人民戦線自身に対する評価はどうだったのか。この論文でクノーリンは、人民戦線は「労農、都市小ブルジョアジー、すなわち民主主義的改革の実現のために団結した巨大な人民の大多数の合同」¹²であり、「人民戦線の計画はこの合同の計画であった」と述べている¹³。果してこれは人民戦線に対する肯定的評価なのだろうか。いやこれは否定的評価である。何故ならば、クノーリンが属する階級対階級戦術派は、いままで統一戦線戦術、人民戦線戦術を否定し、それとの対決姿勢を示していた。この論文から、クノーリンが第七回大会以降、あくまでもファシズムに対するための戦術として、人民戦線戦術を妥協的に容認したと推測出来る。しかし、前述のことからクノーリンは、その戦術の適用はあくまでもファシズムが打ち倒され

るまでの限定されたものと理解するようになったのではなかろうか。つまり、人民戦線が社会主義革命に結びつかないという考え方を、クノーリンは堅持していた。フランス人民戦線政府の例から解るように、コミンテルンは人民戦線がブルジョア社会、政府、国家を擁護するものと考えてきた。だからこそ現状の施策を重要視したといえる。しかしこの時点の人民戦線戦術派といわれるトリアッティ、ディミトロフ、マヌイリスキー等は、すでに人民戦線が革命に結びつくものと考えていた。人民戦線政府を過渡的移行権力と見なしていたのである。だからこそ現状の施策を第一に重要視する。クノーリンとディミトロフには以上の相違があった。同様の結論を出したとしても、その意味するものが異なっていたのである。

さらに革命への成長転化以外にも、トリアッティ、ディミトロフ、マヌイリスキー等の人民戦線推進派と比較して、クノーリンが見逃している点や間違っている点が多くある。それらをここで列挙しよう。第一にバスクとカタロニアの大ブルジョアジー、カトリック勢力等の他地域におけるものとの相違である¹⁴。バスク及びカタロニアの民族的勢力による民族革命戦争の推進は、彼らが工業地域に位置しているからこそ、より重要な意義を持っていた。そしてこれらの少数民族達も同じく君主制の圧政の下で苦しんできた。つまりこれらの地域の大ブルジョアジーは、他の地域の大ブルジョアジーとはファシズムの受け入れで異なっていたのである。この相違を見抜けなかったことが、クノーリンの階級対階級戦術論を一層特徴付けている。つまり、大ブルジョアジーは大ブルジョアジーとして一括してしまって、その中における差異を見抜けなかったのであった。ブルジョアジーは彼によれば依然として敵対勢力であり、打倒すべき対象であったのである¹⁵。

第二に、改革を困難にさせている状況は、彼によれば長年にわたる反動的な大資本家、大地主の圧迫と支配であったが、実際はそればかりではなかった。特に複雑な左翼勢力の状況があった。これら左翼勢力の諸要求が絡み合ったことによって、共和国としての政策の一本化が困難になった。クノーリンは複雑な状況を見抜けなかった。このこと自体が階級対階級戦術の単純な図式では既にスペインの現状を把握出来なくなっていたことを意味していたのではなかろうか¹⁶。

第三に、ブルジョア民主主義革命か社会主義革命か、という図式主義に左右されていて、その間の段階にどのような意義があるのか、何をなすべきなのか、解決、打開方法を与えていない。この点から判断して、社会主義革命に結びつかないからこそ、当面の妥協的な「民主主義的な」政策を行うべきだ、と主張してい

るようだ。「スペイン革命の下でその社会主義革命の発展の可能性についての問題はあつたのだろうか」¹⁷と疑問を發し、それに対して「このような条件(帝國主義的状況)のもとで、第一番目のもの(ブルジョア民主主義革命)が第二番目のもの(社会主義革命)に成長転化しないわけにはゆかないことは、論証の必要はあるまい」¹⁸。スターリンの文章を引用して述べているように、クノーリンは、形の上では社会主義革命に転化することを提示していた。しかし期待してはいなかった。それ故、内乱勃發前後の政府、共和国の形態についての差異、特に内乱以後のスペイン共和国側の新しい型の民主主義共和国への変化(ファシズムの物質的根拠の喪失等)という点にも注目出来なかった¹⁹。

さらに、また社会民主主義者に対しては、その政策の不徹底を「口先だけの《左寄り》」²⁰として非難している。唯一共産主義者だけが「民主主義革命のスローガンを守っている」²¹ことを示唆しているのである。社会民主主義者に対しても否定的評価を相変わらず堅持している。社会ファシズム論ではないが、伝統的な社会民主主義者に対する不信感の表明である。

5. クノーリン論文に対する評価

クノーリンとトリアッティ等との最大の相違点は、前に述べたようにスペイン革命の「社会主義革命への成長転化」をクノーリンが疑問視する点である。トリアッティはこのようには語っていない。むしろ社会主義革命への多面的な要素、様々な方法、形態、すなわち過渡的移行形態を提示しているといえる。ディミトロフでさえ「まだソヴェト国家ではないが」²²として、それが社会主義革命に到達する可能性を提示している。これに対してクノーリンは、「成長転化の実践的問題」と述べているが、転化のためには何をなすべきかという具体性、積極性すらないのである。

このクノーリン論文と同様の視点で書かれたものに、ロゾフスキー、ヴァルガの論文がある²³。このうちヴァルガ論文とクノーリンの論文を比較してみよう。ヴァルガ論文「スペインの革命」は、1936年7月のスペイン内戦勃發以前(『共産主義インタナショナル』誌 No.10、1936年5月)に書かれたものである。故に、1936年9月のディミトロフの演説に見るような「新しい型の民主主義共和国」等の変化の視点はない。当然のごとくヴァルガが考えていたスペインの政府は、第

七回大会のディミトロフと同様、真の「人民戦線政府ではない。左翼ブルジョア政府である」²⁴。左翼ブルジョア政府としてのブルジョア民主主義革命政策の徹底を、ヴァルガは指示している。結論として彼は、農業問題解決、すなわち農地改革という形で「農民窮民大衆を革命の共通行動のために工業労働者の指導の下に統一すること」が、「革命戦略の決定的重要点」²⁵であるとしている。このことをふまえて、前述の左翼ブルジョア政府を支持するとともに、ブルジョア民主主義革命を遂行することが「人民革命の勝利」を勝ち取ることが出来る、と語っている。さらに「その可能性は備わっている」²⁶とも述べている。ヴァルガ論文とクノーリン論文は、同様にブルジョア民主主義革命政策を遂行することを支持しているが、ヴァルガの場合は1936年7月以前、つまりスペイン内戦勃発以前の論文で語っているのに対して、クノーリンの場合は1936年10月に発表された論文でそれを語っている。そしてクノーリンの論文は「社会主義革命」または「人民革命」への可能性を疑問視しているが、ヴァルガは「可能性は備わっている」ことを述べているのである。クノーリンは左翼ブルジョア政府の政策であった。1936年7月以降の変化を考慮していない。このことがマヌイリスキー、ディミトロフ、トリアッティと異なっていた点だった。すでに真の人民戦線政府として見ていたディミトロフは、左翼ブルジョア政府としての政策ではなく、人民戦線政府としての政策の具体化を、トリアッティに求めたのであった。

クノーリン論文をまとめるならば次のことがいえよう。まずこの論文の中で、クノーリンが第七回大会以前は決して認めようとしなかった人民戦線に対して、第七回大会以降、一応の承認(妥協)を与えたことが感ぜられる。クノーリンは人民戦線の方針を認めざるをえなかった。人民戦線政策への支持や政策の正しさを強調しているからである。これはクノーリンの論文の中で見る事が出来る、唯一の、クノーリンの進歩した点といえるだろう。しかし、第七回大会のディミトロフの主張と同様に、人民戦線が社会主義革命に転化する可能性を否定的に見ていた。また、様々なスペインの状況を見抜けなかったことは、彼の階級対階級戦術派としての限界を示しているのである。当時の人民戦線戦術派の三人は、第七回大会よりもさらに進んだ理論的水準に達していた。以上の点から、マヌイリスキー達はこの論文に激怒し、まず次に述べるようなマヌイリスキーによる反論を提示し、対抗論文としてのトリアッティ論文「スペイン革命の特殊性について」²⁷を公式に提示することになる。またトリアッティ論文が『共産主義インタナシ

ョナル』誌だけではなく、『プラウダ』にも掲載されたことは、トリアッティ論文がクノーリン論文を完膚なきまでに打ち砕くためであった。

以上のように、スペイン内戦期においてもクノーリンの守旧派の立場は明白であった。彼の論文については、さらに次のことが言えるだろう。まずこの論文から攻撃姿勢は感じられない。むしろ社会主義革命に転化する可能性がないことを表明しているように、消極的姿勢さえ感じられる。資本主義と情勢の評価はスターリンの文章を引用して、資本主義が「帝国主義的状况下において死にかかった資本主義に転化」²⁸し、ソヴェト方式によって「ブルジョア革命がプロレタリア革命に接近し成長転化する」ことを示唆している。社会ファシズム論ではないが、伝統的な社会民主主義者に対する不信感の表明である。さらに成長転化の実践的問題として、「相当程度その指導者の組織能力次第」²⁹と、暗に人民戦線に参加する政党の統一をほのめかし、共産党化を促しているといえる。つまり、共産党の一党独裁しか存在しえないことを表現したいのだろう。改革の具体性、積極性はない。権力形態と革命権力の問題は提示していない。彼が想定したものは当然、一党独裁である。第七回大会当時に比べ、消極的かつ防衛的な人民戦線論を固持していることが唯一の彼の進歩であった。またそれが彼の限界でもあったことは明らかである。クノーリンの成長転化論は明らかに共産党行動自由論を念頭において語られていた。

6. おわりに

クノーリンはその後スターリン粛清によって逮捕され、銃殺された。前述したように、この論文に対しマヌイリスキーは激怒したといわれている。比較的保守よりの立場を示すマヌイリスキーが激怒したことは驚くべきことである。マヌイリスキーを通じて、クノーリンの抵抗派の立場がソ連側に知られ、逮捕に結びついたといっても過言ではない。クノーリンの論文発表は、自らの立場を回復するどころか、まさに自分自身を永久に葬ったといえる。

- ¹ Георгий Димитров, *Из выступления на заседании Секретариата ИККИ по испанскому вопросу 18 сентября 1936 г.*, 《Вопросы истории КПСС》, № 3, 1969, с. 12-13. (邦訳: 「スペイン問題について 1936年9月18日、共産主義国際ナショナル執行委員会書記局会議における演説」 デイミトロフ選集編集委員会編訳『デイミトロフ選集』第2巻 (大月書店、1972年)、224-225頁。
- ² E・H・カー著、富田武訳『コミンテルンとスペイン内戦』(岩波書店、1985年) (以下E・H・カー (A) とする)、58頁。クノーリン論文を最初に紹介したのは、E・H・カーのこの著書だった。E・H・カーと後述するアゴスティ以外にこのクノーリン論文について述べているものはない。ちなみに、クノーリンを知ることのできる文献として、次のものがある。K. Graudin, "V. Knorin." *In Latyshskie revoliutsionnye deiateli*, Riga, 1958., A. F. Bereznoi, and S. V. Smirnov., *Boitsy revoliutsii. Leningrad, 1969.*, E. Knope, *Vilis Knorins literaturas kritikas*, Riga, 1970. またクノーリン自身の著書として次のものがある。V. Knorin, *Kurze Geschichte der KPdSU(B)*, 1935., V. G. Knorin, *Fascism, Social-democracy and the Communists (Thirteenth Plenum of the E.C.C.I. Reports and Speeches.)*, 1934., V. Knorin and B. Ponomaryev, *Communist Party of the Soviet Union: a Short History*, 1935., V. G. Knorin, Nikolay Evreinov, Anatoly Lunacharsky et al, *PUTI RAZVITIYA TEATRA ("The Ways of the Theater Development")*, Stenographic Report. First Edition, M., Kinopechat', 1927.
- ³ Вильгельм Кнорин, *Зачто борется испанский народ (О характере испанской революции и ее движущих силах)*, 《Правда》, октябрь, 3, 1936, стр. 2. 尚、クノーリンの論文は同一紙面に全文が掲載されているので以下の註ではページ数を挙げない。邦訳は、ヴィルヘルム・クノーリン、島田顕訳「スペイン人民は何を目指して闘争しているか」『スペイン現代史』第8号 (1992年8月)、37-42頁。E・H・カーのクノーリンに対する指摘が正しいのかも検証すべきである。
- ⁴ アルド・アゴスティ著、石堂清倫訳『コミンテルン史』(現代史研究所、1987年)、1156頁。またはB・ラジッチ、M・M・ドラチコヴィチ著、勝部元、飛田勘次郎訳『コミンテルン人名事典』(至誠堂、1980年)、175-176頁参照。アジベーコフらによれば、第6回大会で執行委員候補、1931年3月から4月に

かけての第11回執行委員会総会で幹部会会員候補と政治書記局員、1933年11月から12月にかけての第13回執行委員会総会で政治書記局員となっている。Г. М. Адибеков, Э. Н. Шахназарова, К. К. Шириня, *Организационная структура Коминтерна 1919-1943*. М., 1997.

⁵ *Party and government officials of the Soviet Union, New Jersey, 1969., Who was who in the USSR, New Jersey, 1972, p. 283., В. А. Торчнов, А. М. Леонтьук, Вокруг Сталина, Историко-биографический справочник, М., 2000, стр. 255-256., Центральный комитет КПСС ВКП(б) РКП(б) РСДРП(б) 1917-1991, М., 2005, стр. 241., К. А. Залесский, Кто есть кто в истории СССР 1924-1953 гг., М., 2009, стр. 281.*参照。この文献によると全連邦共産党(ボ)の中でクノーリンはプロパガンダ、アジテーション担当であった。またさらにクノーリンは編集者としては『共産主義インタナショナル』、『ボルシェヴィキ』、『プラウダ』を歴任していた。しかし人民戦線戦術を支持しない者は第七回大会における執行委員会から排除された。クノーリン、ピャトニツキー等は転換に最後まで反対し、そのために彼らは執行委員会からはずされたらしい。特にクノーリンは第七回大会以降にディミトロフがその席に座ることとなった、執行委員会の書記長の座にいた。また1937年には前述したように中欧書記局局長の座を今度はトリアッティに明け渡すことになる。1936年以後、クノーリンに残された地位は『ボルシェヴィキ』、『プラウダ』だけとなる。

⁶ E・H・カー著、内田健二訳「コミンテルンの黄昏 1930-1935年」(岩波書店、1986年)(以下E・H・カー(B)とする)、5頁。

⁷ E・H・カー前掲書(A)、58頁。アゴスティは「べつのもっと『おだやかな』解釈も、すなわち戦略上本質的に重要な知育における革命的民主主義の経験を重んじて、『民主主義的』強国との同盟を危うくしないというソヴェト対外政策の要求ともっとも密接に連動するものという解釈も共存しつづけた」と述べている。これがクノーリンの目的であったと述べることはできないが。「おだやかな」ということについては、クノーリン論文も共通している。アゴスティ前掲書、916頁。

⁸ Вильгельм Кнорин, указ. статья.

⁹ там же.

¹⁰ там же.

¹¹ там же.

¹² там же.

¹³ там же.

¹⁴ там же. 民族的な視点、多民族国家としてのスペイン、そしてその抑圧されてきた歴史は、彼の論点には一切ない。本文でも述べたように、クノーリンが大ブルジョアジーのもつ一方の面しか把握していないことがよく解る。

¹⁵ トリアッティは民族ブルジョアジーについて、次のように述べている。「スペインの封建性から抑圧されていた諸民族のブルジョアジーの多くのグループまでも、共和国の防衛のために結集した。(中略) ファシストの勝利は自分たちの民族的独立ないし自治のいっさいを失うことを意味するであろうし、民族的抑圧の旧制度への復帰を意味するであろうことをきわめてよく知っているからである」。П. Толъятти (М. Эрколи), *Обособенностях испанской революции*, 《Коммунистический Интернационал》, № 16, 1936.), 《Правда》, октябрь, 16, 1936, стр. 20. (邦訳: パルミーロ・トリアッティ「スペイン革命の特殊性」パルミーロ・トリアッティ著、山崎功訳『統一戦線の諸問題』(大月書店、1975年)、45-60頁) また大ブルジョアジー、大地主をめぐっては、トリアッティ、ディアスに対立があることを中塚氏は述べている。これらの見解はコミンテルン内部においても一致したものではなかったことを示している。中塚次郎「スペイン内乱における共産党の土地農民政策」『スペイン史研究』第4号(1987年3月)、5頁。

¹⁶ またクノーリンは社会党系、共産党系、アナーキスト勢力、トロツキスト勢力など労働運動勢力の分裂状況を指摘していない。彼は単に社会民主主義に対する論調にとどめている。クノーリンの社会ファシズム論の未克服を示しているといえよう。

¹⁷ Вильгельм Кнорин, указ. статья.

¹⁸ там же. スターリン「レーニン主義の基礎について」『スターリン全集』第6巻、114頁。

¹⁹ ディミトロフ、トリアッティ、ホセ・ディアスの論述は数々の点で相違があるものの、この点においては共通している。

²⁰ クノーリンはこの点に全く触れていない。Вильгельм Кнорин, указ.

статья.

²¹ там же.前掲註 15 参照。

²² Георгий Димитров, указ. статья, стр. 13.

²³ С. А. Лозовский, *Задачи испанского пролетариата*, 《Красный интернационал профсоюзов》, 1936 № 10. Е. Варга, *Революции в Испании*, 《Коммунистический Интернационал》, № 9, 1936.このうちメンチェリャコフは、クノーリンと同様、抵抗の意義を唱える上記の二つの論文、ロゾフスキー論文、ヴァルガ論文を、次に挙げる彼の論文の中で紹介している。「さらにスペイン革命の特徴についての問題はトリアッティに一心の注意を喚起させた一つの重要な問題であった。この問題をめぐって、何度か白熱した議論がコミンテルン執行委員会において交わされた。コミンテルン指導者の中にはブルジョア民主主義革命の期間の短縮とそれを《プロレタリア革命の序章》へ変化させることの支持者が存在したことは知られている」。М. Т. Мещеряков, 《Испанские Письма》: Палмиро Тольятти, в кн. Проблемы испанской истории, М., 1987, стр. 12.

²⁴ このヴァルガ論文は戦前に古藤利久三氏によって邦訳されている。Е・ヴァルガ「革命スペインの分析」『中央公論』1936年10月号(1936年10月)、220-241頁。

²⁵ Е. Варга, указ. статья, стр. 27 (邦訳:236頁) .

²⁶ там же, стр. 31 (邦訳:241頁) .トリアッティは反乱直前にもスペインについての論文を書いている。この当時のトリアッティの結論はヴァルガと同様であったことがわかる。П. Тольятти (М. Эрколи), *Борьба испанского народа против фашистских мятежников*, 《Большевик》, № 19, 1936.

²⁷ П. Тольятти (М. Эрколи), *Борьба Об особенностях испанской революции*, 《Коммунистический Интернационал》, № 16, 1936.), 《Правда》, октябрь, 16, 1936, стр.もしも、山極潔氏のようにスターリンがソ連邦の国家利益保持のために人民戦線を強かに推進したのなら、クノーリンが人民戦線に反対する論文を書く余地などは恐らく残っていなかっただろう。スターリンがマヌイリスキー、ディミトロフ等に転換の許可

は与えたが、人民戦線戦術の推進には消極的姿勢であった。だからこそ、クノーリンにも論文を書くことができる僅かな隙間が残されていたといえよう。山極潔「コミンテルンにおける人民戦線戦術の形成過程」『コミンテルンと人民戦線』（青木書店、1981年）。

²⁸ Вильгельм Кнорин, указ. статья.

²⁹ там же.